

「平和の俳句 終戦記念日特集」

2018年08月18日

「東京新聞」は、2015年の正月から3年間、「平和の俳句」を朝刊に毎日連載した。俳人の金子兜太氏と作家のいとうせいこう氏が選者になって、全国の読者から寄せられた平和を詠んだ句を、紹介した。俳句には「季語」は必須で、ある状況を鋭く切り取る写実が基本なのだろうが、「平和の俳句」は、季語は無くてもいい、思いを込めた思想性を詠んでもいいと、従来の俳句観から自由であった。だから、老若男女を問わず、自由な句が寄せられた。私は毎朝が楽しみで、月に一度、心を動かされた句を紹介し、感想を書いてきた。金子兜太氏のご逝去によって中止になったが、終戦記念日特集として、呼びかけたところ、7,349通もの句が寄せられたそうである。「平和の俳句」への期待は前と変わらないようで、それは、とりもなおさず、平和への人々の篤い願望である。いとうせいこう氏と俳人の黒田杏子氏と夏井いつき氏が選者となって、8月15日の紙面に紹介された句の中から、紹介し、例によって、私の自由な感想を書きたい。

「たひらけしひとひはちがつじゆうごにち 岩松明子(54歳)」。「平」も「成」も「たひらぐ」と読むそうで、「たひらけし」は平穩という意味で、「ひとひ」は一日である。「平穩な一日、8月15日」と平仮名十七音で詠んでいる。岩松氏は、平穩な8月15日を喜び、いつまでも続くようにと祈っている。津田塾大学の女子大生だったと思うが、敗戦の詔勅を聞いた直後、モンペを脱ぎ捨て、スカートにはき替え、グラウンドでくるくる回りながら踊った。そのスカートを美しく見入ったと書いた文章を読んだことがある。おしゃれのできる平穩な日々を奪うような時代を招いてはならない。8月は、平和に関する催しが多いのは当然であろう。「戦争は八月だけしたわけじゃない 越智祥太(50歳)」。平和への思いは8月だけではない。日本国憲法12条は、自由・権利の保持義務、乱用の禁止、利用の責任を謳っているが、それは「国民の不断の努力によって」保持すると書かれている。「平和」はまさに「不断の努力」によって作られるものである。

「戦車より鉛筆1本 董草 倉橋千弘(79歳)」、「1本の鉛筆祈りを孵化させる 秋山千佳(38歳)」。美空ひばりの「一本の鉛筆」は下記のように歌っている。「一本の鉛筆があれば 私は あなたへの愛を書く 一本の鉛筆があれば 戦争はいやだと 私は書く」。パキスタンの少女、マララ・ユスフザイさんは「1人の子ども、1人の教師、1冊の本、1本のペン、それで世界は変えられます」と語った。一本の鉛筆やペンがどんな武器よりも強いという知性の時代を作ることが、これからの政治の使命である。

「ぼくははい句で平和を知った 鈴木主暉(8歳)」。鈴木君は「平和の俳句」を読んで、平和について考えるようになったのであろう。子どもたちに理解され、巻き込んだ「平和の俳句」は素晴らしい。「平和ってリコーダーならミの音だ 稲川晃成(11歳)」。音階の「ミ」を暖かい音に感じ、「ミ」が平和の音だと言う。大人には思いもつかない感性である。ちなみに、「ドレミの歌」では私は「ソ」が好きである。「ソ」は「青い空」で開放感がある。

「叔父帰国『人殺した』としゃくりあげ 高橋和夫(81歳)」。高橋氏が9歳の時、中国北部から復員して来た叔父さんが、ボロボロ涙を流しながら「俺、殺すつまった」「俺、人殺すだ」と言った。叔父さんは中国人を殺したと泣いて告白したが、墓に入るまで無言を通した人もいる。彼らの心の傷を癒す術はない。周囲の親戚は口々に「戦争だもの、しょあんめー(仕方ないさ)」と慰めていた。人を殺すことを「仕方ない」と言い、多く殺した者が勲章を得るのが戦争である。戦争は狂気、共に生きる平和こそが正気である。